

## 「避難所となった自分達の高校」

## 宮城県石巻北高等学校

### 1. 活動の概要

本校は震災当日から体育館を避難所として開放しました。地域の方々と一緒に生徒が取り組んだ活動内容について報告します。体育館には、地域の方々、生徒、石巻赤十字病院から搬送されたの方々、女川の離島からヘリコプターで救助された人等多い時で約400名が避難しておりました。その中でも震災当初から一番マンパワーを必要としたのが、水の確保でした。飲み水や、洗濯や体を拭くための水、それに加え、トイレ用の水と大量の確保が必要でした。そういった中で、生徒が学校のプールの水をバケツで汲む作業を行いました。離れたプールから、大きいとは言えないポリバケツで水を汲み、一輪車に載せて体育館まで運び大きな桶に溜めていきました。多くの方が、避難しており、桶の水はすぐに無くなってしまいます。その為、桶の水を頻りにチェックしに行き、水がないのを確認すると、夜中でも寝る暇も惜しみ2～3時間おきにプールまでバケツを持って行き、桶に水を補充し続けました。時には、どこからともなく「水がないよ。」と避難者の方からの声がありました。しかし、その声を聞くと、学校の事を一番知っているのは自分達！という思いもあるのか、大人より率先して動いてくれました。

地震直後には雪も降り、まだまだ寒い時期でした。大きな余震も続いて起こりました。避難してこられた人々は高齢者の方が多く、中には小さな子どもや怪我をしている人々がおり、不安と絶望、恐怖と寒さで皆がそれぞれ疲れ切っていました。その中で、若さとパワーがある高校生という立場を活かし、自分達の自宅、家族の状況がわからない状態で、仮設のトイレが到着するまでの4日間、本当に大変な仕事を頑張っている姿を多くの避難者の方々が目にしました。後日、生徒に一番大変だったことを聞くと、「プールの水が少なくなってきたとき、寒い時期に下に手を伸ばして、水

を汲み上げるのが大変でした。」との答えが返ってきました。4日間という短い期間に、プールの水が少なくなるほど水を運び続けた生徒たちには感謝の言葉もありません。その後も食糧や支援物資配布の手伝い、給水車からの水の運搬等、自らに出来る仕事を探し、積極的に動きまわる生徒の姿がありました。



「震災当日の体育館の様子」

### 2. 活動の成果等

避難している方々に頼りにされ、感謝されたことが生徒たちにとって一番うれしいことだと思いますが、生徒の内面でも大きな変化が見られました。数日後、ボランティア活動を続けていた生徒の親が迎えにきたときに見せた顔と、活動をしている時の顔つきが全然違ったのです。本当に責任感を持って活動していたのだと感じました。真剣な顔を長い期間見ていたので、こんなにやさしい顔をしていたことを忘れてしまっているくらいでした。生徒自ら出来ることを探し、人々の役に立つことを実感できたのだと思います。学校生活とは違い、このように人に必要とされた経験が、今後社会生活に溶け込むうえで、生徒達の中で大きな財産となり、自己形成の大きなカギとなることだと思います。

